



じんけん

発行
豊中市人権教育推進委員協議会
機関紙編集部
(豊中市教育委員会事務局社会教育課内)
電話 06-6858-2580

豊中市人権教育推進委員協議会

<https://toyonakajinkenkyou.com/>



ようこそ人権協へ

人権文化のまちづくりをすすめよう
人権意識をより高めよう
人権尊重の輪を広げよう

ホームページを開設しました。
多くの方に活用して
いただければと思います。



巻頭言

子どもを育てる大切さ

副会長 若柳 玉貴

「オランウータンいのちの学校」というドキュメンタリー番組を観ました。

インドネシアのカリマンタン島には世界でも珍しい特別な学校があります。生徒はオランウータン。森林破壊や密猟などで親を奪われた孤児たちを保護し、野性復帰に向けて育てるいのちの学校です。



先生(人間)が親代わりとなって、食べ物を手に入れる方法、危険から身を守る方法や、仲間との付き合い方、道具の使い方、木の上で寝床を作ることなど、森で生きていくための大切な術をひとつひとつ教えていきます。

オランウータンの子育ては人間の次に長いといわれてい

ます。育児期間は8年、その間に親は子どもに森で生きる術を1日も離れず教えていきます。学ぶことは生きることそのものです。孤児たちはこの学校で保護されない限り生きていけないといわれています。

人間が奪った未来を人間の手で取り戻すいのちの学校は、世界的な企業家やアーティストの寄付で運営を支えています。絶滅の危機にあるオランウータンをこれまで350頭以上野生に帰したということです。

生きるためには学ぶことが大切ということは、私たちも同じだと思います。昨今、子どもを取り巻く問題が多くニュースなどで取り上げられています。心の痛むできごともあります。愛情をもって育てることの大切さを痛感します。子どもを大切に育むことは、未来を豊かにすることだと思います。

「人権教育をすすめる市民の集い」を終えて

コロナ禍で開催が危ぶまれましたが、検討を重ね、多方面からの指導のもと最大限の感染防止対策のうえ、皆さまのご協力のおかげで開催することができましたことを心から感謝いたします。

意見発表…テーマ:『安心』できる学校づくり

発表者:橋本 真理(庄内南小学校長)

記念講演…テーマ:生命の星

講師:新宮 晋(造形作家 絵本作家)



■ 記念講演要旨

絵も、文も、立体もやります。私は何かといいますが…地球人です。

出生から高校まで豊中で過ごす。当時は、戦争末期のひもしい時代。いつも空腹だったが、恵まれた自然の中で楽しいことを見つけて遊んだ。伊丹の飛行場にもよく出かけた。実物を見ながら木彫りの飛行機を作り、日本兵に手先が器用だと褒められた。敗戦後、連合軍の統治下になってもかわらず飛行場へ行った。米兵にチョコやチューイングガムをもらったこともあった。物不足が続いていたが、周辺には米軍車両が走り、漂うガソリンの匂いに感激したのを憶えている。「ないことは素晴らしい!ないものは創り出

す!」と学んだ子ども時代を経て、現在の東京芸大に進学し、1960年に官費留学生としてローマへ。興味は、四角い絵から立体絵画、そして屋外造形へと広がっていく。そんなとき、作品が大阪造船所の社長の目にとまりスカウトされ、6年いたローマを去り帰国。美術界というより建築界デビューし、風で動く、水で動くもの、地球のすばらしさを表現した作品を作ってきた。“私はアートを信じている。言語・人種や年齢という制約をこえて、心で感じ、心へ伝わる。”そんないろいろな形で参画できる施設「地球アトリエ」を2024年開設に向けて進行中。

会計 林 久美子

■ 意見発表要旨

庄内南小学校は、豊中市の南部に位置しています。令和2年に創立50周年を迎えました。本校は、令和8年に千成小学校・庄内西小学校の3小学校、第七中学校と統合されて、(仮称)南校となります。南校開校に先駆けて、令和5年に(仮称)庄内さくら学園が開校しますので、開校準備の様子を参考にしながら、「ゆるやかに」「なだらかに」統合することをめざして話し合いを行っています。

庄内南小学校が大切にしていること

- ・お互いを認め合える子ども
 - ・仲間の願いを応援する子ども
 - ・将来に向かって前向きに生きる子ども
- 今年の学校教育テーマ「結束・迅速・安心」

私の考える学校における

子どもにとっての『安心』とは何か

- 『守られている』と感じること
- 『平等』であること
- 『頼ることができる』誰かがいること

参加者の声...

- ・新宮さんの夢あふれるお話に感動しました。若い世代の人々と世代を超えてつながり、夢が繋がっていくのは素晴らしいと思います。
- ・庄内南小学校の橋本校長先生の意見発表は、子を持つ親として安心して子を学校に通わせることができると思う内容でした。
- ・橋本校長先生のお話から、小学校で子どもたちに安心して生活できるように、どのように取り組まれているのかよく分かりました。



『守られている』と感じること

登校時・校内での子どもたちの変化を見逃さないように心がけています。話を聞き、困りごとを解決してもらうことで『安心』を手に入れるのではないのでしょうか。

『平等であること』

子どもたちの『平等』への感覚はするどいものです。

『何でできないの?』よりも

『どうしたらできるのかな?』

どうしたらより成功に近くなるかを一緒に考えることは大切です。

『人が人として幸せに生きていく権利』のことを人権と言うと聞きました。自分の権利だけでなく、まわりの人のことも考えていくことを大切にしていきたいと思います。

副会長 渡邊 美代子

豊中市人権協は今日まで「市民の人権感覚の育成と、人権が大切にされた市民社会の実現」をめざし、取り組んでまいりましたが、自主的市民団体として、今後、自らの財源確保も大事なことを考え、昨年度にひきつづき「人権教育をすすめる市民の集い」においてご参加の皆様へ支援金をお願いいたしましたところ33,146円の支援金をお寄せいただきました。皆さまの貴重な支援金は今後の人権協の活動に活用させていただきます。ご協力ありがとうございました。

地区委員会活動 現地研修会

十三中校区 生野コリアタウン

合同現地研修会を通して

十三中校区常任委員 荒川 由美子

前日の大雨が嘘のような穏やかな小春日の12月8日に、十三中校区人権合同現地研修会でコリアタウンに行きました。

はるか昔、鶴橋まで湾が入り組んでいて海の向こうから人びとが渡ってきて定住し、国際色豊かな村を作ったことや、さまざまな困難な時代や出来事を乗り越えて力強く生きていった人びとの足跡を、人権協の西田先生がとても分かりやすく楽しくガイドしてくださいました。そして実際に現地でも先生のお話を聞くことにより、臨場感を肌で感じました。

今回、たくさんの方に参加していただきました。これは十三中校区の各地区代表委員さんが普段からあたたかく皆さんに接しているからだと思います。

合同現地研修会を通して、自分の心の片隅に温かい人権の灯をともしてくださったと感じます。



二中校区 児童養護施設『翼』

子どもが大切に育まれる社会をめざして

桜井谷東地区代表委員 地藤 祐美

今回のお話の中で印象的だったエピソードの1つに、地域小学校において児童の保護者を指す言葉を「お父さん」「お母さん」から「おうちの人」へ統一したというものがある。

これは『翼』との密な連携があつてこその変化であり、施設児童の心情を慮ることから始まったのだが、このケースに限らず自分にとっての当たり前が誰かを傷つけたり困らせてはいないかなど、想像力を働かせることは人権を考える上での出発点であると思う。その中で得られた気付きから小さな変化を起こし続けること、未来を担う子どもたちを大切に育んでいくことや自分たちの周りの人たちへの温かく優しい心を忘れないことがどんどん輪になり、誰もが安心して幸せに暮らせる社会へと繋がるのだと信じている。

(翼に関する詳細は人権協 HP 機関紙バックナンバー第160号をご参照下さい)



第二回推進委員研修講座を受けて

テーマ 「すべての子どもが輝く学校をめざして」

講師 矢木 克典さん(大阪薫英女学院高等学校 参事)



今回の推進委員研修講座では、豊能地区教職員初任者研修時の「障害」についての考え方のお話を聞きました。

今は「障害」という表現から「症(しょう)」という表現になって誰でも特性はあるものとの捉え方でした。特性は適切な関わり方をすることで「個性」として力を発揮して、その子の強みになることがわかりました。適切な関わり方とは「合理的配慮」をして、社会にある障壁を取り除くことであつて、私たち自身の考え方や物事の見方も変えることが必要だと感じました。問題行動のある子どもを「困った子ども」と見るのではなく『困っている子ども』として見ることで、問題行動だけに焦点を当てずに、その子がどんなときに(先行条件)、問題行動が起こり、その後、どんな出来事があるのか(行動の結果)を一連の流れで捉えて、注意するときは具体

的に適切なタイミングで行い、その結果として望ましい行動をしたときは具体的にどこが良かったのかを褒めて、自己有用感を持ってもらうことがとても大切だとわかりました。

また、特性のある子どもを理解するための実態把握(アセスメント)のポイントは、できないことばかりを聞くのではなく、どんなことが「がんばれるのか(強み)」を聞くことによって子どもの特性の理解に繋がり、できないはダメではなく、なぜできないのか? どうしたらできるのか? という視点を持つことが大事だと気付くことができ、自分の子育てにも生かせることがたくさんあると感じ、とても有意義な研修を受けることができました。

庄内さくら学園中学校常任委員 國見 静香

学校では今

「一人ひとりが強いつながりをもてる学校」をめざして

庄内さくら学園中学校長 亀谷 智

昨年度（2020年度）、本校は第六中学校と第十中学校が統合されて、新しく「庄内さくら学園中学校」として生まれ変わった学校です。そして令和5年度（2023年度）には、庄内小、野田小、島田小の3小とも統合され、小中一貫校の義務教育学校「庄内さくら学園」が誕生する予定です。新しい学校を建設していくにあたって、庄内小学校、第六中学校の敷地を明け渡すこととなり、第六中は第十中の敷地で統合されることとなったのです。それが昨年度の4月でした。しかし新型コロナウイルス感染拡大に伴い、4月7日に開校式・入学式をただけで、翌日より休校となってしまい、新しい学校の船出がなかなかできず、ようやく6月に再開となったのです。

庄内さくら学園中学校の開校に伴い、学校スローガンは、「一人ひとりが強いつながりをもてる学校～『自治の力』を高め、未来を切り拓く」としました。この「一人ひとりが強いつながりをもてる学校」というスローガンは、統合される前の第六中生徒会執行部と第十中生徒会執行部の交流会の中で決まっていたものです。「統合されてできる新しい学校を、どんな学校にしていきたいのか」を両校の生徒会執行部で話し合い、出てきたスローガンです。生徒どうしはもちろん、教職員、保護者、地域の方々とのつながりを深くもっていきけるような、そんな学校にしていきたいとの思いが込められています。ですから、その思いを形にしていこうと学校スローガンにあげました。しかし行事や活動が、コロナ禍の中で中止あるいは縮小という形ですすんでいきました。そんな中でも「自分たちの学校は、自分たちの力で創っていこう」との思いは、少しずつ生徒会活動を軸に形となって表れてきているのではないかと思います。

今年度の入学式で、生徒会執行部の代表の「歓迎の言葉」の中で新入生に次のように思いを伝えていました。

「ここで、大切なことを二つ伝えます。一つ目は、学校スローガンである『一人ひとりが強いつながりをもてる学校』です。強いつながりをもつというのは、一人ひとりがお互いのことを理解し、助け合うことです。私たちはこの学校スローガンをとても大切にしています。二つ目は、生徒全員がさくら中の生徒会の一員だということです。今日からみなさんもさくら学園中学校生徒会の一員です。生徒会活動は、行事だけではなくありません。何気ない日常の中で、思いやりと優しい心を持つ。これこそが本当に大切なことです。学校スローガン、生徒会活動のこと、この二つを心に刻んでほしいと思います。」

私は校長の役割は「学校の中にどんな空気感を作り出せるか」だと思って、これまでやってきました。つまり「一人ひとりにとって居心地がよく、つながりを実感できるような学校」を子どもたちと共に創り出していくことを大切にしているんだということを実感してもらえるように意識して取り組んできたつもりです。そして1年後には、豊中市初の義務教育学校が開校しますが、果たして「どんな空気感に満たされた学校」として生まれ変わっていつくれるでしょうか。

みなさん、温かく見守っていただければと思います。



編集後記

昨年、東京2020オリンピック・パラリンピックが1年遅れで開催されました。これまで禁止されていた、選手たちによる人種差別への抗議行動などが一部認められるようになり、抗議を表明するポーズをとる選手の姿を目にすることがありました。

オリンピック憲章に「多様性と調和」というものがあります。いかなる種類の差別も許さず、お互いの違いを受け入れ、認め合う。

このような機会が人権問題に目を向けるきっかけになればと思います。

最後になりましたが、機関紙「じんけん」162号発行にあたり、ご執筆、ご投稿いただきました皆さまに心よりお礼申し上げます。

書記 福田 みどり